

子どもと言葉に
向き合い続けて



光村図書「国語」

子どもと言葉に 向き合う

私たちが初めて国語教科書を発行したのは、昭和二十五年。最初の教科書に名づけられた「かざぐるま」には、四つの羽に「話す、聞く、書く、読む」活動が象徴され、その活動は「軸である」人間力によってしっかりとささえられ、文化を創造しつつ進歩のらせんを描きながら進展していく」とされました。

この理想を具現化するために一貫して大事にしてきたのは、理性と感性の両面から言葉の力を育てるということです。言葉で世界とつながり、言葉で世界の中に自分を確立する子どもたちのために、私たちはこれからも、言葉の力を育む学びの在り方を追究していきます。

未来に向かって、 たゆまぬ挑戦を

私たちには、社会の変化と要請に応えながら、全ての子どもたちが学ぶ楽しさを感じ、確かな学力をつける教科書をつくる責任があります。そのために、特別支援教育の視点をいち早く教科書づくりに取り入れ、拡大教科書を発行したり、教育のデジタル化を見据えてデジタル教科書を発行したりするなど、改訂のたびに新しい試みに挑戦してきました。

教育DXに向けたGIGAスクール構想の進展で、今また、子どもと学びを取り巻く環境は変わり始めています。未来を見据えて学びを切り開く私たちの挑戦は、これからも続きます。



あゆみ

光村図書の教科書は、言葉へのこだわりと本物を見抜く力で、長く愛される教材を多数、世に送り出してきました。同時に、子どものよりよい学びの実現に向けて、常に挑戦を続けてきました。



昭和25年度版

初出の主な教材 (●は令和2年度版まで継続して掲載されている教材)



昭和46年度版

- 「くじらぐも」 中川李枝子(二年)
- 「たんぼぼのちえ」 植村利夫(二年)
- 「こんぎつね」 新美南吉(四年)
- 「ゼッケン67」(四年)
- 「白いぼうし」 あまんきみこ(五年 ※昭和52年度版より四年)
- 「やまなし」 宮沢賢治(六年)



昭和49年度版

- 「ありの行列」 大滝哲也(三年)



昭和52年度版

- 「大きなかぶ」 西郷竹彦(二年)
- 「たぬきの糸車」 岸なみ(二年)
- 「スイミー」 レオニ・レオニ／谷川俊太郎訳(二年)
- 「くまの子ウーフ」 神沢利子(二年)
- 「モチモチの木」 斎藤隆介(三年)
- 「一つの花」 今西祐行(四年)
- 「わらぐつの中の神様」 杉みき子(五年)



昭和55年度版

- 「はなのみち」 岡信子(二年)
- 「じどう車くらべ」(二年)
- 「どうぶつのおちやん」 増井光子(二年)
- 「お手紙」
- アーノルド・ローベル／三木卓訳(二年)
- 「つり橋わたれ」 長崎源之助(三年)
- 「大造じいさんとガン」 椋鳩十(五年)
- 「生きる」 谷川俊太郎(六年)



昭和58年度版

- 「創造」する力」 加藤秀俊(六年)



昭和61年度版

- 「ふきのとう」 工藤直子(二年)
- 「ちいちゃんのかげおくり」 あまんきみこ(三年)
- 「おみやげ」 星新一(五年)
- 「大陸は動く」 大竹政和(五年)



平成元年度版

- 「西風号のそら難」
- クリス・パン・オールズバーク／村上春樹訳(六年)



平成4年度版

- 「ずうっと、ずっと、大ききだよ」
- ハンス・ウィルヘルム／久山太市訳(二年)
- 「三年とうげ」 李錦玉(三年)
- 「一本の鉛筆の向こうに」 谷川俊太郎ほか(四年)
- 「赤い実はいじた」 名木田恵子(六年)



平成8年度版

- 「わたしと小鳥とすずと」 金子みすゞ(三年)
- 「手と心で読む」 大島健甫(四年)
- 「海の命」 立松和平(六年)



平成12年度版

- 「あらしの夜に」 木村裕一(四年)



平成14年度版

- 「森へ」 星野道夫(六年)
- 「平和のとりでを築く」 大牟田稔(六年)



平成17年度版

- 「すがたをかえる大豆」 国分牧衛(三年)
- 「アップとルーズで伝える」 中谷日出(四年)
- 「千年の釘にいどむ」 内藤誠吾(五年)
- 「カレーライス」 重松清(六年 ※令和2年度版より五年)



平成23年度版

- 「百年後のふるさとを守る」 河田恵昭(五年)
- 「鳥獣戯画」を読む」 高畑勲(六年)



平成27年度版

- 「想像力のスイッチを入れよう」 下村健一(五年)



令和2年度版

- 「たずねびと」 朽木祥(五年)
- 「帰り道」 森絵都(六年)

確かな力がつくように

— 説明文の二教材構成を始める

現在も続く説明文の二教材構成を始めたのは、実は、五〇年以上前の、昭和46年度版教科書でした。見開き完結の短い教材で文章の組み立てを学び、それを長い文章で活用して読むことで、確かな力がつく構成になっていました。授業時数の削減により、平成14年度版、平成17年度版ではなくなりましたが、平成23年度版から再び始めました。

子どもの学びに願いを込めて

— 副題とびら詩

昭和55年度版教科書から、より教科書に親しみがもてるように、「かざぐるま」「ともだち」などの副題を付けました。さらに、昭和58年度版教科書からは、巻頭にとびら詩を新設しました(一年上を除く)。国語教育への願いや子どもたちへの期待などを込めて、それぞれの副題にふさわしい詩を、まどみちおさんと、羽曾部忠さんに書きおろしていただいています。副題やとびら詩に込めた願いは、今も脈々と受け継がれています。

全ての子どもの学びの機会を

— 拡大教科書の誕生

拡大教科書は、弱視の子どもの負担を軽減するために、活字を大きくした教科書です。光村図書は、法制化に先駆け、平成4年度版から拡大教科書の制作を続けています。通常の教科書を単に拡大するのではなく、内容を損なわないように再構成し、文字サイズの異なる三種類を発行しています。



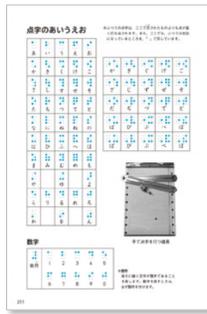
拡大教科書

通常の教科書

「本物」に触れて、理解を深める

— 触って確かめられる点字のページ

平成12年度版教科書から、「手と心で読む」という教材の資料として、実物に近い点字を用意しました。知識として知るだけでなく、実際に体験することで理解を深めることを期待したものです。令和2年度版教科書では、「手と心で読む」は掲載していませんが、さまざまな人にとっての文字について理解を深める目的で、点字に触れられるページを引き続き用意しています。



教育のデジタル化に向けて

— 業界初 デジタル教科書の発行

平成17年、教科書をデジタル化して、教室で大きく映し出して授業ができる、指導者用のデジタル教科書「を商品化しました(現在の「指導者用デジタル教科書・教材」)。小学校の教科書としては初めての試みで、これにより、新しい授業のスタイルが生まれました。現在は、GIGAスクール構想により、一人一台端末が実現しました。タブレット端末の効果的な活用に向けて、教科書に二次元コードを付したり、学習者用デジタル教科書・教材を発行したりするなど、広がりのある学びを追求し続けています。



子どもの主体的な学びのために

— 高学年を合本に

高学年は、一年間の学びの見通しをもち、前に学んだことを振り返りながら、自ら学習を進めることができる学年です。平成23年度版教科書から、子どもの主体的で積極的な学びを支えるため、高学年の教科書を学年一冊構成にしています。



教材の力

教材の魅力は、子どもたちの学ぶ意欲に直結します。新しい知識や考え方に触れる喜び、想像することの楽しさを感じてもらいたい——そんな思いを胸に、教材を作成しています。

「国語」のために 書きおろす



どの学年にも、書きおろし作品・文章を掲載しています。最新の情報や考え方、そして、子どもたちの「今」を見つめ、その道に精通した書き手と編集部が、教材となる作品・文章をつくります。

教科書のために多くの作品を書きおろしている石井睦美さんに、教科書に物語を書くことへの思いについて語ってもらいました。

「わたしはおねえさん」平成23年度版から2年に掲載

子どものころから、物語を読むのが好きでした。物語のなかに身をおくと、あたかも自分が実際に経験したようにこころがふるえました。あるいは、実際に経験しながらも自分でさえわからなかった気持ちに、あああれはこういうことだったのかと気づかされることもありました。わたしにとつて、自分をとりまく世界と自分自身をきちんと感じるためにも、物語は必要なものでした。そのときは、もちろんそんなことは微塵も思わず、ただ想像の世界に遊んでいただけだったのですけれど。

子どもだったわたしに物語が必要だったように、子どもはだれでも物語が必要だと、わたしは思うのです。そして、その物語に出会う機会が、国語の時間に読む物語だけの子どもいるだろうと。そう思うと、子どもたちひとりひとりのところに届くもの、伸びやかで読んでいる子どもたちの想像の翼が広がるような物語を書きたいという気持ちになります。教科書に物語を書けることの責任と喜びで、つい身を正してしまうのですが、大事なのはそんなことではなく、子どもの目で世界を見ることだと思ひ直します。

石井睦美（作家）



「南に帰る」平成12年度版5年に掲載

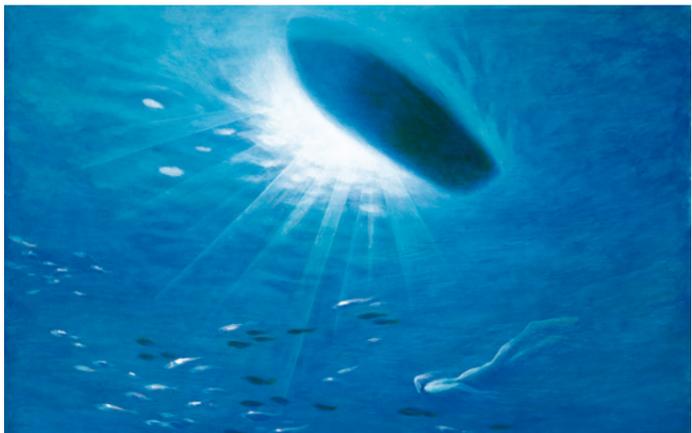


「新しい友達」平成14・17年度版6年に掲載

教材として 届ける

既存の作品や文章を掲載する場合も、そのまま教科書に載せるのではなく、「教材」として表現や表記を吟味します。書き手と相談しながら、教材として作品・文章をつくりあげていくのです。

そのような教材づくりの経緯について、「海の命」の作者・立松和平さんは、教師用指導書に次のような言葉を寄せてくれています。



この作品は、絵本「海のいのち」（ポプラ社刊）を原典としている。絵本は、あくまでも絵と文章が一体となり、両者が相互に高め合いながら語られるべきものである。しかしながら、教科書教材として編集する際には、伊勢英子さんの絵を絵本と同じ場面数だけ取り上げるのが難しいとのことであった。

そこで、文章を読むだけでも物語の時間経過が読者に伝わるよう、原典にない一行空きを加えたり、若干の言葉を補ったりした。

立松和平「作者の言葉——海が育ててくれる」より

進化する 挿絵

挿絵は、子どもたちの理解を助け、想像を広げる役割を果たします。資料性を担保するために、事実調査を重ねるいっぽうで、物語の場合は、イメージを限定しないように、想像の余地を残すようにしています。継続して使用する教材の挿絵も毎回、見直し、時代や学習に合わせて進化させています。



「大造じいさんとガン」

現在の子どもたちにとって「山家のろばた」を想像することは難しいため、平成27年度版教科書から前書き部分に挿絵を入れました。

「じどう車くらべ」



昭和61年度版



令和2年度版

挿絵を比べると、自動車の変遷が分かります。

教科書のこれまでとこれから

光村図書編集委員を務める青山由紀先生と甲斐雄一郎先生に、これまでの教科書を振り返りながら、これらの教科書への思いを語っていただきました。

多様で価値のある

作品・文章を

甲斐 これまでの教科書を振り返ってみますと、昭和46年度版が起点となって、作品の幅が広がってきたように思います。

青山 「くじらぐも」や「白いぼうし」など、今でも読み継がれている多くの作品が、この頃から掲載されていますね。

甲斐 ファンタジーをいち早く教材として取り入れて、それが一つの流れとなって、今日に至っている気がします。

青山 その後も、多様な作品が取り上げられてきましたね。昭和61年度版で初めて掲載された、星新一さんの「おみやげ」などは、今でも話題になることがあります。

甲斐 SF作品が教科書に掲載されるというのは、画期的でしたね。

青山 教科書は、もちろん言葉の力をつけるためのものでありますが、いろいろなタイプの作品に出会わせるきっかけにもなっていますよね。

れます。こういう積み重ねが、六年の「視点」の学習につながっています。

甲斐 「読むこと」の力という点では、二〇〇〇年のPISA調査以来、筆者の書きぶりを批評したり、筆者とは異なる見方を検討したりする力を育むことも、求められるようになってきました。

青山 その点、光村では、説明文と「書くこと」の教材がセットになった単元があります。初めは内容にしか興味なかった子どもも、自分も書き手になると思うと、筆者の言葉の選び方や構成に目が向くようになります。

甲斐 魅力的な教材で子どもに「読みたい」気持ちをもたせつつ、単元構造の工夫で、自然と言葉の力をつけていく。光村らしい工夫といえます。さらに、この学びを教科書の外で生かしていく意識も光村では大切にしている、それが「いかそう」というコーナーに表れていますね。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」

青山 「個別最適な学び」ということに関わって、最近では、「問い」をもつ」ということを意識した授業が、よく見られるようになりました。

甲斐 子どもが、知りたいと思ったことや考えたこと、思ったことを追求する学びということですね。

青山 ときどき、「子どもの気持ちに寄り添っていたら、力がつかないんじゃないか。」という声を聞くことがあります。でも、それは逆だと思えます。教師がいくら時間をかけて説明しても、や

甲斐 そうですね。教科書の作品をきっかけに、読書に興味をもつ子ども数多くいますからね。教科書の作品の幅が広がれば広いほど、子どもの読書の幅も広がるように思います。

青山 説明文にも、「たんぼのちえ」や「ありの行列」など、定番となった教材がたくさんありますね。いつばうで、時代に合わせて、新しい教材もたくさん生み出してきました。

甲斐 光村の説明文は、その時代における価値ある内容を扱い続けてきました。子どもが、時代や社会への見識を深める大切な役割を担ってきたともいえます。

古くは、昭和49年度版で、環境問題をテーマにした「自然を守る」という文章を掲載しました。今日的なテーマである、メディアリテラシーについても、平成17年度版から掲載されている「アッブとルーズで伝える」で、いち早く取り上げましたね。

青山 これから生きていく子どもたちに、何を考えてほしいか。説明文の教材の検討では、その視点が欠かせませんね。

らされたことはすぐに忘れてしまいがちですが、自分で知りたいと思ってる学んだことは、その後も使ってみたくなるし、確かな力になっていきます。

甲斐 主体的な学び手を育てるためにも、「問い」というキーワードは、ますます広がっていくと思います。

青山 「個別最適な学び」と一体的に充実するよう求められているのが、「協働的な学び」ですね。

甲斐 それぞれの考えがあつて初めて、「協働的な学び」になります。「個別最適な学び」で自分の考えをしっかりともち、それをもち寄って、「協働的な学び」にしていく。一体的ということの意味が、ここにあります。

青山 光村の教科書では、平成23年度版あたりから、「あなたは——。」という形で、一人一人の考えを尋ねる設問が増えてきました。また、複数の児童の考えが例示されることも多くなったように感じます。

甲斐 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を支えるものとして、「学び方」を子ども自身が身につけていくことも重要です。学びを俯瞰する力や学びを進めていく力をつけると言い換えることもできるでしょうか。

青山 そうですね。せっかく子どもの「問い」を大事にしても、子ども自身が学び方を身につけていなければ、教師の指示に従うだけになってしまい、子どもは、やらされていると感じてしまいます。**甲斐** 「学び方」そのものを学ぶようなページが、これからの教科書には必要なでしょうね。

教材から言葉の力へ

青山 魅力的な教材で子どもの心をつかんだ後は、その教材で、言葉の力をつけていかなければなりません。

甲斐 その点、光村は、身につけるべき力を明らかにし、分かりやすく伝えることにも、ずっとこだわってきていますよね。平成17年度版からは、「たいせつ」というコーナーを設け、改訂のたびに、その内容に磨きをかけてきています。

青山 教材の配列も、綿密に考えられています。例えば、六年で学習する「視点」ですが、ここにたどり着くまでに、「ちいちゃんのかげおくり」(三年)で「地の文・会話文」を学習し、その後、「モチモチの木」(三年)で地の文を語っている「語り手」の存在に着目します。そして、「ごんぎつね」(四年)では、「ごん」に寄り添って語られていた物語が、最後は「兵十」に転換していくことに触

甲斐 三〇年以上前になりますが、編集会議で教材文を検討していたときのことです。ある教材候補について、現在の光村の社長が、「これは、一読しておしまい」の文章。教科書には載せられない。」と言っていたことをよく覚えています。教室で、みんなで読んでいくうちに、新たな発見があったり、おもしろさを感じたりする教材でなければならぬ。まさに「協働的な学び」の価値が感じられる教材を、光村は作り続けてきたといえます。

青山 私も、編集会議で印象に残っている一言があります。「子どもは、子どもだましにはだまされぬない。」「くじらぐも」の作者である中川李枝子先生の言葉です。一見よさそうな話でも、つじつまがちよつとでも合わない作品は、子どもの心をつかめない。そうしたこだわりが、これまでの光村を支えてきたように思いますし、この姿勢は、これからも、もち続けていきたいですね。

甲斐雄一郎

文教大学教授。専門は、国語教育史。全国大学国語教育学会理事、日本国語教育学会理事長。

青山由紀

筑波大学附属小学校教諭。複数学年の国語を担当。光村図書「書写」編集委員も務める。



「言葉の時代」は終わらない。

光村図書は、1949年の創業時から教育・出版事業に強い使命感をもって、全力で突き進んできました。

70年という歳月を経て、デジタル化、AI化、国際的なシームレス化など、いま社会は大きな変容期を迎えています。

光村図書は、人と人をつなぐ最も優れた手段である「言葉」の力を誰よりも信じてきました。これこそが、これまで、そしてこれからも変わらない光村図書のDNAです。

時代が変わっても、言葉のもつ力は変わりません。むしろ、正しく美しく力ある言葉を自在に使っていくことが、より求められていくでしょう。これからも光村図書は、終わることのない「言葉の時代」を切り拓いていきます。

光村図書の「国語」

— 子どもと言葉に向き合い続けて

2023年1月31日発行

発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675
東京都品川区上大崎2-19-9
電話 03-3493-2111（代表）

光村図書ウェブサイト

光村図書

検索



デザイン 北田進吾
イラスト 中山信一
印刷 協和オフセット印刷

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。



光村図書

